

本学看護学科における解剖見学実習による学生の学びと今後の課題 —解剖見学実習後のレポートの内容分析から—

清水容子、蓮池光人、外村昌子、関口敏彰、上田佳世、高橋可奈英

森ノ宮医療大学保健医療学部看護学科

要旨

本学の解剖見学実習は、鍼灸学科と理学療法学科、看護学科の3年次生を対象に実施している。本研究は学生が解剖見学実習を通して看護の視点から解剖学や生理学の知識を修得することや看護師としての倫理観を育てる機会とするために、解剖見学実習における学生の学びを明らかにし、その取り組み方法等の検討を行った。

対象は参加した看護学科3年生66名の実習後レポートとし、分析はその内容を3つの実習目標ごとに意味あるセンテンスを抽出し、研究者間で検討を繰り返してカテゴリー化した。

結果は実習目標に基づき、「人体構造を理解できる」では感覚的認識として[立体的に捉えた感覚的学び]など、「献体の取り扱いを通して、自己の思いについて説明できる」では[御本人や御家族の思いから[向けられた期待に対する自覚]など、「人体解剖や献体のかかわる法の基本的な事柄や死者への尊厳について説明できる」では[感謝と敬意の気持ち]の計7個のカテゴリーに分類され、学生の学びが明らかとなった。これにより、解剖見学実習が看護学生としての自覚・学習姿勢などを再確認する機会となり、今後の指導方法の基礎資料を得ることが出来た。

連絡先：清水 容子 SHIMIZU Yoko

〒559-8611 大阪市住之江区南港北 1-26-16

森ノ宮医療大学保健医療学部看護学科

I 緒言

近年、超高齢社会の到来や医療の高度化により社会の医療・看護ニーズに対応できる質の高い看護系の人材の確保が大きな課題となっている。平成4年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」施行は、これを契機に看護系大学が急増し、質の高い看護系人材供給に貢献をしている。一方、看護系大学の急増は臨地実習の確保問題や学生資質の多様化を伴い、臨地実習のあり方の見直しや教育内容の工夫の必要性等の課題をもたらしている。これらの現状を踏まえ、大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会報告によると、改正された指定規則（平成20年保健師助産師看護師学校養成所指定規則改正）の教育内容を充実し、看護専門職の基盤となる資質を獲得させ、長い職業生活のスタートラインに立てる人材を育てるために何が必要なのか、各大学が自大学の学生の状況や教育環境等を考慮しながら主体的に検討することが重要であるとしている¹⁾。

本学看護学科においては、看護専門基礎である「人体の構造と機能」（形態機能学）を1年次前期の学修内容として位置づけている。また、本学独自の教育内容として平成25年度から3年次前期に特別課外授業として、学生の主体的参加を基本とした解剖見学実習を実施している。菱沼²⁾は、「息をする」「食べる」「トイレに行く」「話す・聞く」「眠る」などの生活行動はすべてからだのはたらきによって成り立っている。看護の主眼は、繰り返されるこの生活行動を支えることである。したがってからだがどういう仕組みで生活行動を成し遂げているかを知らなくては、看護はできない。と述べている。薄井³⁾も同様に看護の視点から人体の理解をすることの重要性を述べている。このように看護師の基礎知識として人体の解剖・生理学の知識は必要不可欠である事はいうまでもない。しかしながら、本学看護学生に限らず苦手意識を持つ学生が多いのが現状である。菱沼⁴⁾は看護教育において人体の形態機能の学習は必須である。（中略）人体解剖で実際に手にして学ぶことが、人体の理解には最も効果的である、と述べている。また、小林⁵⁾は「医療技術者養成における人体解剖実習の重要性とその条件整備への提言」の中で、単に人体の構造を理解するためだけでなく、医療人として死に対面し死を超える決意するためにも本物を実際に触り解剖する実習があることが望ましい。実習できないまでも、少なくとも人体標本に触れることのできる見学の機会が、すべての医療人の養成課程の中で必須と考える、と述べている。このように解剖見学実習は、学生の人体の解剖生理学的理解の促進だけではなく、医療人としての心構えや人の死について考える重要な機会となる。本学ではこれらのことを踏まえ、解剖見学実習の目標として「人体構造を理解できる」「献体の取り扱いを通して、自己の思い（医療人としての態度・自覚、献体に触れることの価値）について説明できる」「人体解剖や献体のかかわる法の基本的な事柄や死者への尊厳について説明できる」の3つを上げている。これらの目的を効果的に達成させるために、今年度は昨年度同様に実習前から資料の配布や実習の意義、取り組み姿勢等についてのオリエンテーションを行った。加えて解剖見学実習終了後調査票結果を踏まえ、オリエンテーションでの取り組み姿勢の強化および解剖に関する簡単な試験を行った。

本研究は看護教育における課題として、看護の視点から解剖学や生理学の知識をリコンストラクションして学生が用いられるようにする。また、看護師としての倫理観を育てるための検討の機会とする。そのために解剖見学実習における学生の学びを明らかにし、解剖見学実習への取り組み方法等の検討を行う。昨年度は、解剖見学実習終了後調査票結果とレポートからの抽出語分析による出現頻度から学生の学びの傾向を明らかにした。本年度は、各学生のレポート内容を実習目標に基づき学びの状況を明らかにし、実習目標を達成するための今後の課題を検討することを目的とする。

II 解剖見学実習の概要

本学における解剖見学実習は、鍼灸学科と理学療法学科の3年次生を対象として以前より行われていた。看護学科においては、平成25年度から3年次前期に特別課外授業として位置づけ、A大学とA大学献体篤志家団体の全面的な協力を得て行われている。

実習実施までの準備として、約2ヶ月半前に対象学生全員に解剖見学実習へ向けての第1回目のオリエンテーションを行っている。ここでは実習概要と実習への主体的参加の意味と必要性を説明し、参加申し込みの受付を行う。参加申し込みをした学生には資料を配布し、最終オリエンテーション時までには熟読することと配布資料の取り扱いを厳重にすることを指導している。また、主体的に取り組む姿勢を厳守することを誓約する書類も合わせて提出させている。その後、御献体に対する法的・倫理的側面や生命に対する哲学的理解、人体の理解の準備性を高める目的で2回にわたるオリエンテーションを行っている。平成26年度からは最終オリエンテーション時に配布資料の熟読を促す目的で、小テストを実施している。また、実習前後にレポート課題を提示している。これらすべての過程をクリアした学生のみ実習への参加を認めている。

実習は「実習講義」「解剖見学実習」「骨学実習」の3部構成となっており、学生はグループに別れ、各グループに解剖担当教員他、看護学科教員1名を配置し実習を行っている。

III 研究目的

各学生のレポート内容を実習目標に基づき学びの状況を明らかにし、実習目標を達成するための今後の課題を検討することを目的とする。

IV 研究方法

1 対象

本学看護学科における解剖見学実習への参加対象となる3年次生66名の実習後「解剖見学実習を終えて学んだこと」に関するレポート

2 研究期間

平成27年9月28日～平成28年3月31日

3 分析方法

対象となる学生レポートを下記の手順で分析する。

- 1) 3つの実習目標ごとに表現されている意味のあるセンテンスを抽出する。
- 2) 目標ごとに抽出されたセンテンスの内容の妥当性を判断する
- 3) 目標ごとに抽出された各センテンスの共通性を検討する。
- 4) 共通性のあるグループをひとつずつまとめる。
- 5) 共通性のあるグループの中から意味や性質を抽出する。

分類したセンテンス、抽出した意味、性質など、妥当性や信頼性の確保については、1)～5)の各段階において、研究者間で検討を繰り返すこととした。

4 倫理的配慮

対象者には、口頭にて研究の主旨を説明し、協力は自由意志であること、得られたデータは厳重に管理しデータ分析後は責任をもって破棄すること、得られた結果は紀要等で発表することがあるが、個人が特定されないようデータの匿名性を保障する。また、実施者が同学科の専任教員であることから調査協力の依頼については強制力を伴う恐れがあることを鑑みて、研究協力に同

意しない場合であっても成績及びその他学生の評価につながる事等何ら不利益を被ることはない旨を口頭および書面で説明する。拒否の意思表示については担当教員に申し出ることができる旨を説明する。なお、本研究は森ノ宮医療大学保健医療学部倫理審査委員会の承認（承認番号2015-31）を得ている。

V 結果

学生のレポート全記述内容を3つの目標ごとに抽出した結果、学習内容として表に示すセンテンスが抽出された。目標1「人体構造を理解できる」に対しては145センテンスと6個のサブカテゴリ、2個のカテゴリが、目標2「献体の取り扱いを通して、自己の思い（医療人としての態度・自覚、献体に触れることの価値）について説明できる」に対しては、63センテンスと6個のサブカテゴリ、2個のカテゴリが、目標3「人体解剖や献体のかかわる法の基本的な事柄や死者への尊厳について説明できる」に対しては、87センテンスと8個のサブカテゴリ、3個のカテゴリがそれぞれ抽出された。

抽出されたカテゴリは[]で、サブカテゴリは< >、センテンスは『 』で下記に示す。

1 「人体構造を理解できる」について

[立体的に捉えた感覚的学び]（表1）、[既習内容を基にした学び]（表2）の2個のカテゴリに分類できた。さらに[立体的に捉えた感覚的学び]には、<感覚的人体の描写>、<感覚的人体のイメージ>、<感覚的個体差の描写>の3個のサブカテゴリが抽出された。

それぞれのサブカテゴリの具体的記述として、『脳の髄質、皮質の色が2色に分かれていた』や『血管の硬さや弾力の違い』など実際に人体を視て触れることによる学生が感じたそのままである<感覚的人体の描写>の記述があった。また、『神経は糸みたいであり、有線であることの理解が深まった』や『実際に触れることではっきりとしたイメージができた』など感覚的な体験を通じたイメージやイメージの再形成などの<感覚的人体のイメージ>の記述があった。<感覚的な個体差の描写>では、『臓器には個人差があることを学んだ』や『構造は同じだが、人によって変わる』など、いくつかの献体の比較による個体差に関する記述をしていた。

[既習内容をもとにした学び]には、<解剖学との結びつき>、<病態学との結びつき>、<看護学との結びつき>の3個のサブカテゴリが抽出された。

具体的記述として<解剖学との結びつき>には、『必ずしも教科書通りではない』や『教科書では実感がなく覚えづらかったものも、実際に見学できて覚えることができた』などテキストや解剖学の既習内容と比較し理解を深めた記述をしていた。また、<病態学との結びつき>には、『心肥大など病気に伴う身体への影響を理解できた』や『臓器の状態でどういう人だったのかなど予測ができた』など1・2年次の既習内容を想起して記述していた。<看護学との結びつき>では、『患者さんの苦しみを今まで以上に理解、それに向けての根拠を持った看護を提供するために考えやすくなった』や『心肥大の心臓を見て病態からの看護の流れとして理解することができた』など御献体の生前の生活状態や苦しみを想像した上で看護について記述していた。

表1 立体的に捉えた感覚的学び

立体的に捉えた感覚的学び	顔や性格が違うように、身体の中の臓器や重さが違う
	子宮は握りこぶしよりも少し小さめ
	脳の髄質、皮質の色が2色に分かれていた
	下顎骨には前面に小さな穴があいていて、そこに神経が通っている
	髄質には白質と灰白質で色調が違っていたし、腎臓はそら豆の形をしていた
	肺は右3葉、左2葉、大動脈には強く弾力がある
	動脈は三層構造であるため弾力性がある
	弾力も確認できた
	血管の太さ、臓器の大きさ、動脈、静脈を触った
	骨盤は下からみるとハート型に見え、仙骨は小さい
	皮膚の厚みや動脈の弾力など実際に触れた
	腎臓はソラマメの形をしていた
	前頭骨や頭頂骨の融合部を観察できた
	神経や動脈、静脈の太さを実際に観察できた
	脊柱は腰椎と仙骨、仙骨と尾骨が融合していた
	筋肉や臓器の位置関係を視覚的に理解できた
	臓器の大きさ、重さ、色が一人ひとり違っている
	骨は何年経ってもきれいな状態であった
	骨学実習で椎骨の数や形を確認した
	骨によって大きさが違い癒合により数が異なる
	骨はとても丈夫で大きさはばらばら
	本人と家族の同意の上で勉強させていただく機会を貰い、身体の構造や苦手な心臓、脳、教科書ではイメージしにくい神経などを学ぶことができた
	大きさ、色、感触などそれぞれに個性がある
	神経についても教わり自分にとって刺激をたくさん受けた
	動脈と静脈については、弾力、形や太さも違っていた
	触れることで臓器の形、固さを学ぶことができた
	食道は細く、気管と太さが違う
	骨の太さ、頭蓋骨の縫合線の濃さも人それぞれ違っていた
	神経は細い繊維のようなもので伝達している
	頸椎が7つ、胸椎が12個、腰椎仙椎が5つであるが実際には数が違い、癒合していたりする
	子宮や卵巣が小さい
	心臓や肝臓の大きさなど一人ひとり違う
	肝臓が臓器の中で一番大きい
頭蓋骨の縫合の骨つながりが人それぞれ違っていた	
筋肉の層が重なり骨に繋がる	
臓器の位置関係もよくわかった	
神経は確かにあった	
血管や神経が身体中を走行する	
神経はこんなに細い繊維のようなもので伝達している	
骨の構造や重さを確認した	
実際に臓器に触れて、動脈や静脈の固さ、血管を思っていたよりも太く弾力があることに驚いた	
人間の骨はかなり丈夫である	
血管の硬さや弾力の違い	
臓器や骨を実際に見ることで不明確だった部分や疑問に思っていたことを理解できた	
臓器の主な場所や大きさは分かっていたが硬さや感覚など実際に見たからこそ学べた	
顔や体の骨は想像より小さい	
子宮は小さく硬い、妊娠すると大きくなることに驚き素晴らしさを感じた	
卵管采に包まれた卵巣を見て、排卵時の状態が理解できた	
臓器や骨を実際に見ることで不明確だった部分や疑問に思っていたことを理解できた	
神経を実際に見て触れて、神経の存在を実感することができた	

感覚的 人体の イメ ージ	心臓の大きさから男女や活動など様々なことが考えられた 頰椎、胸椎、腰椎の違いがわかった 小さな子宮が大きくなり新しい命が生まれるのだと人の誕生のすごさに感動した 実際の軟体を見て勉強することでイメージがわきやすくなる 上大動脈、動脈弓は想像以上に太く、動脈と静脈の硬さも触って違いを確かめることができた 大動脈は想像より太く、ここから全身に血液を送っていることが納得できた 神経は糸みたいであり、有線であることの理解が深まった 実際に触ることで、1つ1つの重みを感じることもできた 臓器だけでなく様々な機能がつながりあって生きているのだと改めて感じた 自分の体にもご軟体と同じ臓器や血管があると考えると、人間はすごいなと感動した 実際に触れることではっきりとしたイメージができた 椎骨を並べるとすべて綺麗に繋がって前彎と後彎も分かった すい臓は思ったよりも小さかった 大動脈弓が思った以上に太い 心臓の拳くらいの大きさで全身に血液を流している 子宮に受精卵が着床し、臍をもっと超える大きさまで成長する伸展力がすごい 臓器の重さや触れた時の感触、血管の太さや厚さなど、実際に手で触れることでしかわからないことがたくさんあった 自分が触っている神経がどこに繋がりを伝達しているのか
	ヒトにより椎骨の大きさや場所にも個人差がある 軟体の臓器の大きさ、形、位置が違っていた 骨の小さい穴や骨縫合の跡などのご遺体それぞれの違いがある 骨がくっついていたり、少ないヒトがいた 各臓器の構造や位置関係、脂肪のつき方や各臓器の大きさが異なっている 体型により、骨の太さ、大きさがまったく違った 体の大きさ、各臓器の大きさ、重さ、骨の太さ、血管の太さ、筋肉のつきかたが違って驚いた ひとりひとりの臓器に個性がある 臓器は各個人での特徴があると思った ひとりひとりで骨の形や大きさが全く違うと感じた 解剖見学でも骨学実習でも、特徴がひとりひとり違うことを発見でき勉強になった 人は見た目・体型が違うが、骨から違うことを実感した 同じ臓器でも人それぞれだった
	骨にも個人の差がある 骨は形や大きさなど同じものは一つとしてなく、違っていた 臓器には個人差があることを学んだ 臓器の位置、しくみ、個人差があることを学んだ 一つ一つの臓器を感じ知り、人によって大きさや色や重みの違いを理解した 骨も一人一人違う 人はひとりひとり違っている 1人1人臓器の大きさが違って、同じものなんかない 骨は一人ひとり違う 骨も1人ひとり違い、ものではなく一人の人だったのだ 人体や臓器に人それぞれの個人差がある 心臓の大きさや血管の太さなどの違い 人それぞれに大きさや方に、数などが全然違う 解剖見学と骨学見学で人によって形や大きさが異なっている 骨や縫合に同じものはなかった 構造は同じだが、人によって変わる 臓器の大きさには個人差があり、身体の大きさに比例しないことがわかった 一人一人違っており、構造は同じでしたが大きさが違う 骨も臓器なども人によって大きさや形など様々あり全く同じ 椎骨や頭蓋骨は人により癒合していたり、大きさが少しずつ違うが、穴の数などの基本的な構造は一緒だった 臓器の位置関係や機能は同じなのに、大きさなど一人一人違う
	立体的に捉えた感覚的学び 感覚的 個体差の 描写

表2 既習内容を基にした学び

解剖学との結びつき	重さ、大きさ、形がさまざま教科書通りではない	
	形、大きさ、重さなど教科書では学べないことを学んだ	
	教科書の図と同じ形や配置だった	
	頸椎同士がくっついていたり、腰椎と胸椎がくっついていたり骨の数や形状が教科書通りでなかった	
	臓器の形は教科書通りであったが、重さや大きさはそれぞれ違った	
	1つ1つを触って詳しくみることができた、同じものは1つもなく骨の大きさ状態すべてが違った	
	教科書通りでなく椎骨が1つ足りなかった	
	何人もの献体を見て、全ての臓器が教科書通りではないことが理解できた	
	教科書では実感がなく覚えづかったものも、実際に見学できて覚えることができた	
	教科書などで見る図と実際の臓器では全然違い、一致させることが難しかった	
	特に骨学実習で、教科書や模型で学ぶことができないことがあった	
	教科書では学べない骨と筋のつながり、臓器の大きさ、色、重さ、固さなどを学ぶことができた	
	臓器の大きさ、形、色、位置は個人差があり、教科書通りではないと学んだ	
	教科書で学んだことを、実際に見ることで理解が深まった	
	臓器には個人差があり、教科書と同じものではないことがわかった	
	臓器は教科書通りではないことがわかった	
	必ずしも教科書通りではない	
	既習内容をもとにした学び	病態学との結びつき
		心肥大を起こしているヒトは心臓の大きさが2個分あり、個人差がある
黒い部分は病気の可能性がある		
心肥大など病気に伴う身体への影響を理解できた		
胃が大きく脂肪が多い、肺が黒いなどから生活背景をイメージ		
臓器の状態でどういう人だったのかなど予測ができた		
ペースメーカーや肝肥大により肺が圧迫されたのではないかなど様々なことを感じた		
病変がある臓器では色が変わっていたり、硬くなっていたり、肥大していたりと大きな違いがみられた		
心肥大の大きな心臓や、肺が黒くなっていたり、小腸のひだや横隔膜や肝臓を触って学べた		
どんな疾患があったのだろうとアセスメントした		
心肥大により肺が圧迫され呼吸のしづらさがあったであろう		
生前の状態を知ることができた		
ペースメーカーをしている人の心臓の大きさに驚いた		
肺の色をみて喫煙していたのではないかと		
模型の臓器、骨、神経などは体格や疾患の有無により異なる		
看護学との結びつき	呼吸を聴取する際には、背中側から行うことが大切であることがわかった	
	患者の生活背景をとらえ、身体に影響が及ばないように生活指導をする必要性	
	患者さんの苦しみを今まで以上に理解しそれに向けての根拠を持った看護を提供するために考えやすくなった	
	献体の方の生活を想像することで、どのような看護で安全・安楽でいられたか考えた	
	臓器に個性があるように、その人に合ったアセスメント、看護計画が重要と考えた	
	臓器の個人差に驚き、看護ケアでも個別性を求められる意味を理解できた	
	私は看護師となり、今回みた身体に不具合が生じた人をアセスメントし、不自由をケアするのだと思った	
	骨の大きさや色、密度など一人一人違うことがわかり、その人に合わせた援助が重要な理由を理解できた	
	位置を先入観ではなく、目で確認したり聴取しながら探していくことが必要であると再認識できた	
	心肥大の心臓を見て病態から看護の流れとして理解することができた	
食道や血管と神経のことも直接基礎看護の技術に繋がる		

2 「献体の取り扱いを通して、自己の思い（医療人としての態度・自覚、献体に触れることの価値）について説明できる」について

[向けられた期待に対する自覚] (表 3)、[今後の学習への動機付け] (表 4) の 2 個のカテゴリに分類できた。さらに、[向けられた期待に対する自覚]では、<実習で感じた期待の気づき>、<実習で感じた期待に対する意志表明>の 2 個のサブカテゴリが抽出された。

それぞれのサブカテゴリの具体的記述として、<実習で感じた期待の気づき>では、『良い医療人になってほしいという大きな期待の上で成り立っている実習ということを忘れない』や『将来医療従事者になる者への大きな期待が込められている』という実習させていただいた献体者の方々の思いを受けとめている記述があった。<実習で感じた期待に対する意志表明>では、『献体くださった方のご好意が無駄にならないよう、立派な看護師になりたいと思った』という期待に応えるような看護師を目指すなどの記述があった。

[今後の学習への動機付け]では、<実習から得た学習意欲>、<実習体験を意味づけして得た学習意欲>、<今までの学習の振り返り>、<再確認した看護師への思い>の 4 個のサブカテゴリが抽出された。<実習から得た学習意欲>には具体的記述として『これまで以上に勉強していきたい』、という実習を契機に学習を意欲的に取り組もうという思いが記述されていた。<実習体験を意味づけして得た学習意欲>では、『ご遺体の気持ちを無駄にしないよう、ご遺体とご家族に感謝し、これからも勉学に励もうと思った』というように、今回の体験の意味を学習意欲として表現していた。また、『今までの 2 年間でもっと勉強できたのではないかと反省した』など自己の勉強不足を反省する<今までの学習の振り返り>の記述があった。さらに『貴重な経験を無駄にせず、立派な看護師にならなくてはならないと改めて感じた』という<再確認した看護師への思い>の記述があった。

表 3 向けられた期待に対する自覚

向けられた期待に対する自覚	御献体くださった方、家族に恩返ししたい
	御献体本人・ご家族の方の信用と期待に応えられるような立派な看護師にならないと一人前の医療人になることが恩返し
	献体をされた方とその後家族に感謝の気持ちを忘れずに精進したい
	「医療の進歩に」という理由で身体を提供してくださった方々の期待を背負った者として、この体験を看護にどのように活かすか考えた
	献体から学ばせてもらったことを今後の看護につなげていきたい
	医療の発展と医療者の成長を願っている方へ看護師を目指す者としてその期待に応えられる人間にならなければいけないと感じた
	献体して下さった方への感謝の一つとして、看護師になりたいと皆さんの人を救おうと思った
	ご献体本人とご家族が提供して良かったと思えるように、これからも頑張って勉強したい
	献体して下さった方々の期待に応えられるよう、感謝してもっと勉学に励まなければと感じた
	献体を希望した本人の気持ちを尊重された家族の方々の意思に恥じないよう、精進していくべきと考えた
	学んだことを今後の学習につなげ、看護師として患者にケアを提供することが、自身に求められることと自覚し、一層勉学に励む気持ちが芽生えた
	献体くださった方、家族への感謝と期待にこたえられるような看護師となれるよう努力したいと感じた
	医療従事者を目指す者の学習や医療の発展のために献体くださった方、家族に対し、一生懸命学ぼうという意識が自然とでた
	献体くださった方のご好意が無駄にならないよう、立派な看護師になりたいと思った
	見学実習を通して献体に協力して下さった方、家族の方に感謝しさらに勉強を頑張ろうと思った
	献体くださった方の敬虔な意思と医療者を志す者として自覚と心構えを見つめなおすことができた
ご献体となられた方やその家族の医療の発展への期待を看護で返すことでお礼とする	
献体された方々の期待にこたえたい	

向けられた期待に対する自覚	実習で感じた期待の気づき	良い医療人になってほしいという大きな期待の上で成り立っている実習ということを忘れない
		将来医療従事者になる者への大きな期待が込められている
		医療の発展に期待してご自身の身体を提供して下さる方やその家族の協力があってこそだと認識した
		医療人を目指すものとして解剖を学ぶだけでなく献体の方々に心から心学ばせてもらうことができた
		看護師になる世間からの期待のおかげで、解剖見学実習が成り立つことを忘れてはいけないと思った
		看護師になることは世間からの期待が大きく、責任ある仕事だと感じた
		献体が、私たちの身体から学び、良い医療人になって欲しいと言っているようで、この気持ちは一生忘れてはいけないと思った
		より深く学び今後生きていくことが感謝の印になると感じた
		学生だからできるということに感謝、それだけ社会が医療従事者を目指す人に期待をもつ
		医療従事者への期待からご協力を得られている 医療従事者を育てるために献体をして下さる 今後の医療の発展を期待されている

表4 今後の学習への動機付け

今後の学習への動機づけ	実習学習から得た意欲	これまで以上に勉強をしていきたい
		これからの仕事に対する責任感や義務が明確になった
		これからの自分の糧にしたい
		実習を通して1人でも多くの人の支えになりたいという気持ちが強くなった
		謙虚に努力を重ねていきたい
	実習体験を意味づけして意欲	新たな気持ちで勉強していく
		将来医療従事者となるものとしてしっかり学びたい
		この経験を必ず今後生きていきたい
		自分自身にとって本当に有意義な時間となり、もっと勉強を頑張りたいと思った
		この経験を活かし、これから勉強に挑んでいこうと心から思った
今までの学習の振り返り	この学びを将来活かせるように、忘れないようにして、これから勉学に励みたい	
	解剖生理の知識不足を改めて感じ、もう一度勉強しようと思った	
	勉強不足を実感し、解剖見学という貴重な体験したことをこれからの学習に活かしたい	
	ご遺体の気持ちを無駄にしないよう、ご遺体とご家族に感謝し、これからも勉学に励もうと思った	
	期待に応えられるだけの技術、知識、気持ちがあるのか考えると、未熟で情けなく感じた	
	今までの2年間でもっと勉強できたのではないかと反省した	
	人の体に対する思い、関心、知識が全く十分でないことを知った	
	看護師として働くようになって常にも心に持ち続け、よりよい看護を提供という形で社会へ還元しようと思っ	
	一生懸命勉強し、立派な医療人になるための努力を改めて思った	
	医療従事者になる気持ちをより強く持つことが出来た	
	これからの医療人になっていく私の心構えみたいなものの一部ができたような気がする	
	解剖生理や人の死について考えたことは、今後の看護観として大切に持ち続けたい	
	貴重な経験を無駄にせず、立派な看護師にならなくてはならないと改めて感じた	
	あと2年ほどの学生生活での学び、資格をとってからの学びにつなげたい	
	これからの勉強を頑張りたい、良い看護師になろう	
理想の看護師にむけ、学習を深め頑張ろうと感じた		
看護師を目指す中、看護師として働くうえで一生の財産であると感じた		
将来医療に携わる者になることを実感した		
私は必ず社会に貢献する看護師にならなければならない		
将来立派な医療者として育つことを期待されている		
命の大切さ、尊さをしっかり持ち、看護師を目指す		
今日見た事、学んだことを一生忘れずに今後生きていこうという意識が強くなった		

3 「人体解剖や献体のかかわる法の基本的な事柄や死者への尊厳について説明できる」について

[感謝と敬意の気持ち] (表 5)、[実習で感じた死生観] (表 6)、[実習に臨む姿勢] (表 7) の 3 個のカテゴリが抽出された。

[感謝と敬意の気持ち]では、<献体者とその家族に対する感謝>、<解剖見学実習への感謝の気持ち>、<関係者も含めた解剖見学実習への感謝>、<献体してくれた方と家族への敬意>の 4 個のサブカテゴリが抽出された。

実習に参加した学生は、『ご遺体やご遺族に感謝しなければ感じた』、『最後の黙祷では感謝の気持ちで一杯になった』という<献体者とその家族に対する感謝>の気持ちを記述していた。また、<解剖見学実習への感謝の気持ち>の現れとして、『家族の方に対する感謝の気持ちを、ご遺体から勉強させていただくことで表すことができたと思う』というように実習に取り組む姿勢を記述していた。また、『恐怖感があったが、実習直前の講義を受け、実際に献体を見たことで、感謝の気持ちももてた』というように御献体、御遺族とともに関係者すべてに対する感謝の気持ちとしての<関係者も含めた解剖見学実習への感謝>を記述していた。<献体してくれた方と家族への敬意>では、『御献体を提供して下さったご本人とその遺族に敬意を表する』、『亡くなってからも尊敬し続けなければならない』と御献体を崇高なものとして敬い尊敬する心情を記述していた。

[実習で感じた死生観]では、<生と死の気づき>、<献体者と家族の思いを想像>の 2 個のサブカテゴリが抽出された。『この実習を通して、死についてや生について考えることができた』、『命の重みを感じた』といった死の状態から命、生を感じ<生と死の気づき>をしていた。また、『医療の発展、社会の貢献のために、死後、異なる意味で生きることを選んだご本人、家族の思い、心の広さ、暖かさを理解することができた』と<献体者と家族の思いを想像>していた。

[実習に臨む姿勢]では、<献体を前にした心構え>、<実習講義を聴いての動機づけ>の 2 個のサブカテゴリが抽出された。御献体を目の前にして『屍活師であることを忘れずしっかり学ぶ』、『少しの時間でも無駄にせず積極的に学ぶ』という<献体を前にした心構え>の記述があった。また、実習講義による学生の心の変化として『実習講義を聴講することで恐怖心は消え、勉強させていただき気持ちになった』、『医療従事者になる心構えをお話から学んだ』という<実習講義を聞いての動機づけ>の記述があった。

表 5 感謝と敬意の気持ち

感謝と敬意の気持ち	最後の黙祷では感謝の気持ちで一杯になった
	献体をしていただいた方々、献体を認めていただいた御遺族のかたがたのお陰であると感謝した
	献体をして下さった方々とその御家族に感謝した
	自分の身体を提供して下さった方とその家族の方に感謝した
	人体への知的好奇心とご遺体の方への感謝の気持ちでいっぱいになった
	献体をして下さった方、そのご家族に対するこの感謝を忘れない
	私は献体をした叔父を悲しみだけではなく誇りに思うことができ、献体をして下さった方、ご家族に感謝しなければならない
	この実習の重みを理解し、ご献体やご遺族の方々に感謝の気持ちを忘れない
	献体された方やご家族の方々に感謝すべきと思った
	ご遺体やご遺族に感謝しなければと感じた
	献体として預けて下さる方々にお礼を言いたい
	ご献体の方々やご家族の方に感謝の気持ちを持つ
	ご遺体を提供して下さった方に感謝した
「人間」というもの、「命」というものを献体となって学ばせていただいた方の高い志に見学の後の黙祷と礼では感謝の気持ちでいっぱいになった	

感謝と敬意の気持ち	解剖への見学の感謝 実習	自分の命が失われた後にも医学の発展や様々な思いを込め献体する決断をしていただいた方々とその家族のおかげと言っても過言ではない
		ご家族の思いを十分に考え感謝の気持ちをこめた
		悲しみの中にいる時に医療関係者の方が迎えにこられたらなどを考えるとご遺体を提供して下さった方々に感謝しなければいけないと思った
	関係者も含めた解剖見学 実習への感謝	家族の方に対する感謝の気持ちを、ご遺体から勉強させていただくことで表すことができたと思う
		ご遺体を提供して下さった方々、同意して下さったご遺族、私たちが学ぶ場を提供していただいた大学関係者の方々に感謝した
		白菊会の皆様やその他のたくさんの方々の協力があったので、とても感謝の気持ちでいっぱいになった
		限りある生の世界で目的を持って生きるといった生き方を見つめ直す機会を提供して頂いた全てに関わる機関や人々に感謝をします
		人に対して敬意をはらうことや感謝の気持ちをもつことができた
		この実習に協力して下さった方々に感謝の気持ちがとても強い
		恐怖感があったが、実習直前の講義を受け、実際に献体を見たことで、感謝の気持ちをもてた
	献体してくれた方 と家族への敬意	貴重な機会を下された方や遺族の方達へ心から感謝の気持ちを伝えたい
		解剖見学実習という機会をつくって下さった方々に心から感謝する
		御献体を提供して下さったご本人とその遺族に敬意を表する
		献体として提供して下さった人たちへの敬う気持ちがどれだけ大事がわかった
		敬意の意は忘れない
	白菊会で献体して下さったおかげで解剖見学実習をできていることを知った	
	被験者の方に尊敬の念をもって向き合い、しっかり勉強させていただく	
	体を提供して下さった白菊会の方々の気持ちを絶対に無駄にはいけない	
	自分が亡くなった後の身体を使ってくださいと覚えて下さった全員の方々に敬意を表す	
	亡くなってからも尊敬し続けなければならない	

表6 実習で感じた死生観

実習で感じた死生観	生と死の気づき	その人の生前の様子を思い起こし、その人の人生について考えた
		屍活師の意味について深く考えた
		屍活師に多くのことを教えていただいた
		命の尊さについても改めて考えるよい機会となった
		命の重みやただ生きるのではなく自分のやるべきことを精一杯して生きることが大切だと感じた
		人が死ぬことや、亡くなった方にどのような態度で接すれば良いかを学べた
		この実習を通して、死についてや生について考えることができた
		看護学生としてではなく、人として自身の生活や考え方を見つめなおすきっかけとなった
		生と死について深く考えさせられた
		生きることを学んだ
	死生観について考えた	
	人の尊厳や死に対する考え方	
	人の尊厳、個別性を大切にする	
	命の重みを感じた	
	の献体 思い者と 想像 家族	布を取ったとき怖さはさらに強くなったが、医療の発展や学生のために自分の身体を犠牲に献体された方、ご家族にとっても失礼なことだと思った
医療の発展のため、学生に期待をしても、身体を切り刻まれて人に身体の中を触れられるのは相当な覚悟が必要であったのではないかと		
献体して下さった方にも色々な思いがあって、その気持ちによって私たちが学ぶことができた 自分の体を使っていいと、自分と家族を犠牲にした		

実習で感じた死生観	献体者と家族の想像の思いを	残された家族の苦しみを想像した
		もしもこれが自分の家族だっただらと思ってしまう、胸が苦しくなった
		「献体して下さった方を自分の家族だと思いなさい」という実習講義での言葉に悲しく、苦しい気持ちになる
		本人が献体を望んでいても約半数のご遺族の方から同意が得られない
		白菊会に入っているだけでも献体を断る方もいる
		実習が終わったあとに感じた、ご遺体に傷を入れるという残酷さ、たくさんの人たちに臓器を触られるという辛さ、怖さは大事に持ち続けたい
		医療の発展、社会の貢献のために、死後、異なる意味で生きることを選んだご本人、家族の思い、心の広さ、暖かさを理解することができた

表7 実習に臨む姿勢

実習に臨む姿勢	献体を前にした心構え	声のない心を学ぶ
		意欲を持って積極的に自身から積極的に参加する姿勢で学ぶ
		私たちの勉強のため、提供して下さった方に教えてくださっているのに遠慮するのは失礼なので、積極的に学んだ
		屍活師として私たちにいろいろ教えてくださる
		献体を前にしたとき、怖いという感情を捨てて医療人という姿勢で学ばせていただく
		解剖室に入った時には、強い気持ちを持って献体から多くのことを学ぶということを教わった
		学びのチャンスを無駄にしないように始めは目を背けてしまったが途中からは積極的に質問し触れて確かめることができた
		亡くなった方の思い、その思いに賛同して下さったご家族に心から感謝し実習に臨もうと改めて思った
		解剖室に入った瞬間、空気が変わり、この実習の重みを実感した
		最も印象に残ったのは「屍活師」であり、解剖見学する中でもその意味を忘れずに接しようと思った
		ご献体になって下さった方やご家族の方に礼の気持ちをもって実習室に入った
		最初は怖い気持ちはあったが、この部位はどうなっているのか見学したい気持ちが高まった
	将来の医療の進歩のために献体下さった方、ご家族の方の気持ちを念頭に置き実習に臨むことができた。	
	学生はたくさんの人から期待されており、生半可な気持ちでは参加してはいけない	
	自分たちがどのような姿勢で解剖見学実習に臨むべきなのかが改めてよくわかり、気も引き締まりました	
	戸惑いや葛藤・混乱もあったがしっかりと大切に勉強させていただこうと心に誓った	
	こんな機会もうおそらく一生ないから時間の限りたくさん学ばせていただく	
	少しの時間でも無駄にせず積極的に学ぶ	
	これまでの人生を歩んできた方々の身体で勉強させていただくという実感がどっと沸きあがった	
	屍活師であることを忘れずしっかりと学ぶ	
医療従事者としての心構えをお話から学んだ		
実習講義の動機づけを聞いて	亡くなった方は話すことはできないから身体が語って教えてくれるという言葉に実習でたくさん教えてもらわないといけないと思った	
	実習講義を聴講することで恐怖は消え、勉強させていただく気持ちになった	
	実習講義を聞いて、実習室に入ったときは思う存分学ばせていただくと思った	
	学生としての責任を感じた	
	実習講義を受けることで、解剖見学実習は貴重で責任の感じる実習であると改めて感じた	
	恐怖感があったが、実習講義を受け、実際に献体を見たことで、学びの気持ちに切り替えることができた	
	医療に携わる者としての心構えや倫理観をもてた	

VI 考察

1 実習目標に基づく学びの状況

1) 目標1「人体構造を理解できる」について

この目標に対して145センテンスと6個のサブカテゴリ、2個のカテゴリが抽出された。学生は実習において御献体を実際に視る触れる体験を通して、立体的な臓器の位置関係や重さ、太さ、弾力性などの感覚を実感としていた。また、感覚刺激を通して自分なりのイメージ化し、個体差に着目していた。当然ではあるが学生の感覚的認識としての[立体的に捉えた感覚的学び]に関する内容の記述が最も多くなっていた。感覚刺激を通じた学びは、解剖見学実習でのみ経験出来る学習方法である。冒頭でも触れたが、菱沼⁴⁾が「人体解剖で実際に手にして学ぶことが、人体の理解には最も効果的である。」と述べているように、人体の形態機能の知識が必修である学生にとって最もインパクトが強く効果的学習であることがわかる。

また、感覚的に認識した浅い学びから、ややステップアップした学びとして、既存の学習である形態学のテキストと比較した学びや疾患による変化に着目した内容があった。看護学生の解剖見学実習後のレポート内容分析に関する同様な質的研究⁶⁾にも、本学と同様に既習学習との比較に着目した<解剖学との結びつき>、<病態学との結びつき>に類する記述がみられている。このことから、人体の形態機能的理解を深めるためには欠かせない実習であることがわかる。

さらに学びを発展させた記述として、看護技術やその人の生活状況等を推察し看護と関連づけ思いをめぐらせている<看護学との結びつき>があった。既習の看護技術との結びつきとしては『呼吸を聴取する際には、背中側から行うことが大切であることがわかった』というように、肺の下葉は背面にあるということを実際に確認し、フィジカルアセスメントで学習した内容を想起し認識している。また、『患者さんの苦しみを今まで以上に理解しそれに向けての根拠を持った看護を提供するために考えやすくなった』や『心肥大の心臓を見て病態からの看護の流れとして理解することができた』など、御献体の生前の生活状態や苦しみを想像して看護を考える必要性を再確認している。薄井³⁾は「ナースとしては、病気のタイプがどのような生活結果であるかをおおづかみにすることができれば、病人の生活過程に焦点をあてて観察し、生活のための方向を定めることができる」と述べている。このように解剖見学実習は看護の視点から人体を観察し、感覚的に捉えることができる部分から推測することで、因果関係を科学的に思考する能力を育てる機会となっていると考えられる。これらの記述は、先の類似した研究と比較すると本学の特徴的な記述内容である。この特徴的な状況は、類似研究の対象学年は1年次であるのに対し、本学の対象が3年次であることの差異によるものであると考えられる。解剖見学実習に参加する3年次学生は、カリキュラム進度の基礎医学の学習や基礎看護学実習、各領域の看護学の履修がある程度終了した段階である。それ故に、看護視点からの学びへとつながりやすい時期である。看護系の大学では、解剖見学実習を機能形態学の履修時期にあわせ1年次に実施しているところが多い傾向にあるが、本学が実施している時期に於いても十分にメリットがあるといえる。

しかしながら、目標1に対する<看護学との結びつき>のサブカテゴリに属するセンテンスは、先に述べたカリキュラムの進度から考えると内容、数ともに極めて乏しいといえる。この時期の学生としては、例えば、生理的食道狭窄から服薬や経管栄養チューブ挿入との関連性、気管支の左右の大きさの差から気管挿管や気管内への異物混入の危険性との関連など、看護視点からの気づきや学びの広がり、深さがあってよいと考える。

2) 目標2「献体の取り扱いを通して、自己の思い（医療人としての態度・自覚、献体に触れることの価値）について説明できる」について

この目標に対して63センテンスと6個のサブカテゴリ、2個のカテゴリが抽出された。

坂井健雄氏の著書⁷⁾である『献体』には、医学部の学生が実習を通して一人前の医師になるにはまだまだ未熟であることを痛感したことや将来多くの人に信頼されるような医師となり、恩返しできるように精進していきたい。という思いがつつられている。また、看護学生やコ・メディカルである理学・作業療法士などの養成過程における解剖見学実習の範疇であっても、人体の形態機能学的な理解にとどまらず、ご献体された御本人や御家族の『医学の発展のために』という思いを感じ、医療人としての自覚を改めて考える機会と成る⁸⁾、とあるように将来の医療人としての使命を自覚できる機会となる。本学に於いても同様に、学生は解剖見学実習に参加させていただける背景に、ご献体された御本人や御家族の「医学の発展のために」という思いがこめられていることをひしひしと感じ受け止めている。また、学生によってはその思いから自身の今の状態の振り返り、今後の学習意欲を高め、将来立派な看護師になることを決意している学生もいる。これらのことから、解剖見学実習が医療人と成る者としての自覚、看護学生としての自覚・姿勢を再確認できる機会となっていると考えられる。

3) 目標3「人体解剖や献体のかかわる法の基本的な事柄や死者への尊厳について説明できる」について

この目標に対して87センテンスと8個のサブカテゴリ、3個のカテゴリが抽出された。カテゴリとして[感謝と敬意の気持ち]、[実習で感じた死生観]、[実習に臨む姿勢]が抽出された。

学生は、解剖見学実習で直接御献体に触れさせていただいたときに改めて命の重さを感じ、命の意味を考えることができていた。また、御献体や御家族に対し感謝や敬意の気持ちを抱いていた。この学びの背景には、事前学習としての御家族の思いや御本人の思いが書かれている手記や献体にかかわる法律等の資料の熟読や御献体に関する事項について事前講義、それを受けての事前レポートの提出があると考えられる。これらの事前学習が頭の中に残り、御献体を直視する場面でその思いが心の中に浮かび上がってきたと推察する。また、実習講義を受けることで、さらに解剖見学実習の意味を強烈に感じ深く理解する結果となっていると考えられる。実習講義による学生の変化として『実習講義を聴講することで恐怖心は消え、勉強させていただく気持ちになった』、『医療従事者としての心構えをお話から学んだ』という〈実習講義を聴いての動機づけ〉の記述がみられる。学生は実習講義を聴講することで、実習前にあった恐怖心など自己のもっている感情を、将来の医療人として真摯に学ぶ姿勢が重要であるという認識に変え臨むことが出来ていた。

2 実習目標を達成させるための今後の課題

目標1について解剖見学実習に参加することで、学生は実習でしか体験できない3次元的人体の形態学的理解が出来ていた。また、少数の記述に留まっていたが看護と結びつけて思考することが出来ていた。目標2、3については、事前に倫理観を養うための資料やオリエンテーションの内容を踏まえ、事前レポートを書くことで解剖見学実習に臨む姿勢が形成されていた。また、当日の実習講義を聴講することでさらにその姿勢が強化され、学生は医療人としての責任感や御献体に接する倫理観を自身の心にしっかりと内在化させた状態で実習に臨むことが出来ていたと考えられる。これらの結果から、今回の実習前後の取り組みにより、それぞれの目標に対する学びが得られていると考えられる。しかしながら、学生個々により学びの深さ、広がりには差があり、中には浅い視覚的な学びのみでとどまっている学生もあることは容易に推測できるが、本研究では、個々の学生がどの程度目標を達成しているのか把握出来ていない。今後は個人の学びの到達度がどの程度なのかという視点でも調査が必要であろう。

しかし、看護教育に於いては、最終的に看護ケアをする前提として必要な形態機能の理解を深めさせる必要がある。菱沼²⁾が「息をする」「食べる」「トイレに行く」「話す・聞く」「眠る」な

どの生活行動はすべてからだのはたらきによって成り立っている。看護の主眼は、繰り返されるこの生活行動を支えることである。したがってからだがどういう仕組みで生活行動を成し遂げているかを知らなくては看護はできない。」と述べているように、単に人体の立体的理解にとどまらず、看護的視点での理解まで学びを深めさせる必要がある。また、対象学生は後期には看護学臨地実習を控えている。この解剖見学実習で培った将来の医療人としての決意は、今後の自身の学習や臨地実習、さらには看護職になってからも持続出来るように定着化を図る必要がある。1回限りの実習であるため、実習当日のみならず実習前後の教員のかかわりや、取り組みをさらに検討していくことが、今後の課題であると考えられる。

Ⅶ 結論

1 各学生のレポート内容を実習目標に基づき学びの状況について明らかにしたところ以下の結果が得られた。

1) 目標1「人体構造を理解できる」について

- ・ 感覚刺激を通し、感覚的認識としての[立体的に捉えた感覚的学び]をしていた。
- ・ 既存の学習である形態学のテキストと比較した学びや疾患による変化に着目した[既習内容を基にした学び]をしていた。

2) 目標2「献体の取り扱いを通して、自己の思い(医療人としての態度・自覚、献体に触れることの価値)について説明できる」について

- ・ ご献体された御本人や御家族の思いがこめられていることをひしひしと感じ受け止め[向けられた期待に対する自覚]をしていた。
- ・ 自身の今の状態の振り返りをし、学習不足を感じもっと学習しなければならないと[今後の学習への動機付け]をしていた。

3) 目標3「人体解剖や献体のかかわる法の基本的な事柄や死者への尊厳について説明できる」について

- ・ 御献体だけでなくご家族に対しても[感謝と敬意の気持ち]を表現していた。
- ・ 解剖見学実習で直接御献体に触れさせていただいたときに改めて命の重さを感じ、命の意味を考え[実習で感じた死生観]を明確にしていた。
- ・ 将来の医療人として真摯に学ぶ姿勢が重要であるという[実習に臨む姿勢]を得ていた。

2 実習目標を達成するための今後の課題として以下のことが明らかになった。

事前資料や事前レポート、オリエンテーション、実習講義を聴講させることは、将来の医療人としての責任感の自覚や倫理観の内化、そして真摯に学ぶことの動機づけとして有効だった。実習日だけに限らず、実習前後の取り組みが、より効果的なものとなるための検討が必要である。

謝辞

本学看護学科に「解剖見学実習」の機会を提供いただきました御献体者と御家族の皆様、A大学の諸先生方、森ノ宮医療学園専門学校、本学諸先生方に感謝申し上げます。また、御成願されました皆様の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告. 2016. 1. 16 閲覧
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11
- 2) 菱沼典子. 生活行動からみるからだ. 日本看護出版会. 2011.

- 3) 薄井担子. 看護のための疾病論, ナースが視る人体. 講談社. 1987.
- 4) 菱沼典子. 看護学の望む人体構造学の内容と人材の育成. *Quality Nursing*. 2000 ; 6(8) : 680-682.
- 5) 小林邦彦. 医療技術者養成における人体解剖実習の重要性とその条件整備への提言
—医療技術者教育にルネッサンスを—. *解剖学雑誌*. 1998 ; 73 : 275-280.
- 6) 石野レイ子, 古屋敷明美, 兵頭慶子. 看護学教育における解剖遺体見学実習に関する質的研究
—レポートの内容分析による学習内容の検討—. *日本看護学教育学会誌*. 2004 ; 13(3) : 47-57.
- 7) 坂井建雄. 献体—遺体をささげる現場で何がおこなわれているのか—. *技術評論*. 2011.
- 8) 木村智子, 松田和郎, 相見良成, 瀧公介, 本間智, 宇田川潤, 工藤基. 理学・作業療法科の学生に対する効率的な人体解剖見学実習—その有効性と意義—. *形態・機能*. 2012 ; 11(1) : 24-31.